

〔研究ノート〕

虚報が虚報を養う

——大海蛇報道に関する覚書——

細 川 裕 史

I 大海蛇に関する「フェイク・ニュース」

2010年代に入り、ドイツでは2014年度の“Unwort des Jahres (粗悪語大賞)”¹⁾に“Lügenpresse (嘘つき報道機関)”が選ばれ、トランプ政権下のアメリカでは“fake news (フェイク・ニュース)”が大きな話題となっている。その際、あたかもインターネット社会がこうした現象を引き起こしたかのように述べられることもある²⁾。しかし、マスメディアに対する不信や批判がインターネットやソーシャル・ネットワークの普及によって生まれたわけでもなければ、虚報がネット上でのみ拡散されるわけでもない。ドイツ語圏では、新聞の普及によってはじめて「マスメディア」と呼べるものが生まれたときには、すでにジャーナリストは不信と批判の対象になっていたし、その理由はまさに、報道の自由を悪用するジャーナリストたちが自分たちに都合よく捻じ曲げたニュースを報道している、とみなされたからであった³⁾。

たとえば、自らもジャーナリストであったGstav Freytag (1816-1895)の戯曲『ジャーナリストたち (Die Journalisten)』(1854)では、若い新聞記者ベルマウスと彼の書いた記事をチェックしていたボルツ編集長が、以下の会話を交わしている。

ボルツ [...]「新発明の蒸気機関車」,「巨大な海蛇, 発見さる」(飛びあがる)なんてこった。またあの海蛇かよ! 海蛇なんて、煮こごりにして食っちゃえばよかったのに。[...] どういう了見で、こんな使い古

された嘘をまた記事にしたんだ?

ベルマウス ちょうど6行余ってまして、その話がびったりだったもんですから。
(Freytag 1966: 19f.)

ボルツ編集長は、その後、この新人に「使い古された嘘」ではなく、新味のある記事を捏造するよう指示する。なぜなら、彼の信念に従えば、ジャーナリストにとっては読者をおもしろがらせることが何より重要であり、その後起きうることについては無責任でも構わないからである⁴⁾。

その信念の是非はともかく、ここで無責任な「フェイク・ニュース」の例として「巨大な海蛇」が挙げられているのは、なにもFreytagの独創ではない。19世紀中期の新聞業界では、「海蛇発見」というニュースは、「フェイク・ニュース」の典型例だった。Grimmの辞典は、1871年の用例を挙げながら、“Seeschlange (海蛇)”という語を以下のように解説している。

とりわけ、寓話的な(fabelhaft)巨大な怪物を意味し、それは時折、それを見た主張する旅行者による報告に基づいて新聞に登場するが、その存在については今でも、少なくとも疑わしいとされている。[...] そのため、慣用表現として、虚偽の、あるいは疑わしい新聞記事一般を意味する。すなわち、“Ente (虚報)”, “Humbug (いかさま)”。(DWG Bd.16, Sp.69f.)

たしかに、すでに18世紀には、啓蒙主義の影響下で、客観的な事実に基づかない報道が姿を

消しつつあった。Hollmann (1937) は、新聞から追放すべきとされた記事の代表として「海蛇についての息の長いメルヘン」(Hollmann 1937: 42) を挙げている。しかし、こうした試みにも関わらず、大海蛇に関するものも含め「お楽しみのための、多かれ少なかれ疑わしい『一風変わったニュース』」(Ebd.) は19世紀にいたって一掃されることはなかったのである⁵⁾。

その一方で、こうした虚報が「それを見た主張する旅行者による報告に基づいて新聞に登場する」(DWG Bd.16, Sp.69f.) とされている点も興味深い。大海蛇報道は、(Freytagが描いたような)ジャーナリストによって捏造されたものではなく、「旅行者」に起因するものだと解釈されているからである。

では、実際の新聞においては、どのように大海蛇が報道されてきたのだろうか。本稿では、ドイツ語圏において「フェイク・ニュース」の典型例とされてきた大海蛇報道を通じて、新聞史の一面を概観してみたい。なお、本稿では“sea serpent”の訳語として、便宜的に、一貫して「大海蛇」を用いている。ただし、“sea serpent”と英語圏において呼ばれている存在は多種多様であり、日本語の「蛇」から想起されるイメージとは必ずしも一致しない⁶⁾。

II 19世紀における大海蛇報道

Freytagは1816年の生まれだが、ちょうどその翌年、アメリカで大海蛇が注目を集めていた。マサチューセッツ州のグロスターにおいて、1817年夏、何百人もの市民が大海蛇を目撃することになったからだ⁷⁾。8月22日には号外が出され、翌23日にはボストンの『番人(Centinel)』紙が80～100フィートもある「一種のヘビ」について報じている。アメリカでは、その後、19世紀末まで大海蛇の目撃情報が相次いでいるが、その最盛期は1817年から1847年までであり、マサチューセッツ州を中心に、極めてよく似た目撃情報が定期的に報道されつづけた⁸⁾。その間、1845年から48年にかけて、

クジラの骨で大海蛇の骨格を捏造した Alfred Kochなるドイツ人興行師がアメリカとドイツで評判を呼ぶなど、大海蛇は波紋を広げつづけている⁹⁾。

グロスターの大海蛇を巡っては、以下の2つの報道も紹介しておきたい。1つは、既知のヘビ(アメリカレーサー)が「大海蛇の赤ん坊」と報じられたこと(『番人』1817年10月4日号)、もう1つは、地元の漁師が「大海蛇」を追跡したところ、「魚のたてた波」にすぎなかった、というニュースである(ボストンの『ウィークリー・メッセンジャー(Weekly Messenger)』1818年9月10日号)¹⁰⁾。いずれの事件も、大海蛇報道が、本来なら起きなかったであろう誤解(あるいは売名行為)を引き起こした例といえるだろう。

アメリカでの大海蛇騒動が一段落した1840年代末には、今度はイギリスで大海蛇報道が議論を巻き起こしている。1848年、フリゲート艦“Daedalus”の艦長が喜望峰沖で大海蛇を目撃したという談話を『イラスト付きロンドン・ニュース(Illustrated London News)』(1848年10月28日号)が報じると、著名な古生物学者 Richard Owen (1804-1892) が高級紙『タイムズ(Times)』紙上で反論し、論争に発展した。この論争は、少なくとも『タイムズ』1858年2月16日号まで、10年に渡ってつづいている。一方、『イラスト付きロンドン・ニュース』は、1849年4月10日には“Plumper”号の船員が1848年末にポルトガル沖で目撃した「長くて黒い生き物」についても報じているし、その後も、1856年、58年、72年に別の大海蛇の目撃情報を報じている¹¹⁾。

これらの大海蛇について、当時、ドイツ語圏でどれほど報道されたのかは不明である。しかし、通信技術が未発達だった19世紀前半においては、多くのジャーナリストが海外の新聞を自らの記事の情報源としていたことから、この英米からのニュースもドイツ語圏で報じられていた、と考えることができるだろう¹²⁾。

いずれにせよ、ドイツ語圏では何世紀にも

渡って、「ノルウェーの大海蛇」が関心の対象となっていた。この大海蛇についての最古の影響力ある報告は、スウェーデン出身の聖職者 Olaus Magnus (1490-1557) が 1555 年に出版した『北方民族文化誌 (*Historia de Gentibus Septentrionalibus*)』にある。「海魚」についてまとめた第 21 巻において、Olaus は「ノルウェーの大海蛇」について報告しているのだが、これは、あくまで現地に住人からの伝聞を記述しているにすぎない。また、その内容も、大海蛇が王侯の死の「恐ろしい前兆」(オラウス 2017: 598) とされるなど、かなり寓話的である¹³⁾。一方、本人が目撃したと主張しているのは、「グリーンランドの使徒」と呼ばれたノルウェーの牧師 Hans Egede (1686-1758) で、彼は 1734 年にグリーンランド沖で「巨大なヘビのような怪物」を目撃したと日記に書き記している。さらに、ベルゲン司教だった Erik Pontoppidan (1698-1764) も 1755 年に出版した『ノルウェー自然史 (*The natural history of Norway*)』のなかで、1746 年に大海蛇を目撃した水先案内人の宣誓証言を紹介している¹⁴⁾。

こうした一連の聖職者による証言は、その著者の社会的地位や教養の高さから、大海蛇に対する関心を高めることに貢献したが、時代の流れとともに、大海蛇を信じる聖職者は嘲笑の対象になっていった¹⁵⁾。ただし、Freytag が戯曲で大海蛇を「使い古された嘘」呼ばわりした 19 世紀中期になっても、「ノルウェーの大海蛇」に対する科学的な調査がおこなわれている。解剖学者であり動物学者でもあった Martin Heinrich Rathke (1793-1860) は、ノルウェーで自らおこなった聞き取り調査の成果を、1841 年度の『自然史論叢 (*Archiv für Naturgeschichte*)』に発表した¹⁶⁾。そこで Rathke は、目撃者たちはイルカの群を誤認したのだとする説に反論したあとで、以下のように結論づけている。

これらすべてを考慮した結果、以下の結論を疑うことはできないように思われる。すなわ

ち、ノルウェー沖には、長くてヘビのような形の生き物がおり、それは極めて大きく成長することができる。(Rathke 1841: 285)

Rathke は、すべての証言者が海に親しんでいることから、海面付近を泳いでいる生き物を彼らが誤認するはずがないと主張しているが、この反論にはあまり説得力がない。すでに紹介したように、地元の漁師が魚のたてた波を大海蛇と誤認したケースもみられるからである。また、イルカの群であった場合、海面上に突き出された「頭」についての証言はすべて虚偽だということになるが、「そんなことは信じられない」(Ebd.) としか述べていない。

Ⅲ 20 世紀における大海蛇報道

大海蛇報道は、古代からの伝承や迷信と結びついており、科学の発達とともに嘲笑の的になっていった、という単純な道をたどったわけではない。Freytag が生きた 19 世紀よりも圧倒的に科学が発達した 20 世紀においても、大海蛇は世間を騒がしている。その代表例が、ネス湖のネッシーである。もともと同地には聖コロンバ (520?-597) が 565 年に退治したというネス川¹⁷⁾の怪物についての伝承があり、また、近世にもネス湖で巨大な怪物を見たとする報告があった。しかし、怪物の目撃情報が増大したのは、1933 年 5 月 2 日に地方紙『インヴァネス時報 (*Inverness Courier*)』に「ネス湖の奇妙な光景 それは何だったのか?」という見出しの記事が載ってからである。この記事では、同年 4 月 14 日にネス湖でコブのある巨大な生き物のような何かを目撃した夫婦の証言が紹介された。夫婦の証言は、ネス湖の怪物についての伝承を信じていた Alex Campbell なるジャーナリストの手によって、センセーショナルに報じられた¹⁷⁾。Probst (2013) によれば、目撃した夫婦は「ただクジラのような外見の『大きな魚』について語っただけなのだが、記事においては『怪物』がテーマになっていた」(Probst 2013: 35)。

この記事は評判を呼び、同時に、怪物の目撃情報も同年の10月までに20件も寄せられている。また、1934年4月21日には、「外科医の写真」として知られる「ネッシーの写真」が『デイリー・メール (Daily Mail)』に掲載され、この騒動を加速させた¹⁸⁾。ネッシーに関しては、この当時から21世紀にいたるまで熱心な搜索活動がおこなわれており、今後もそうした活動の結果が報道されることだろう¹⁹⁾。

ネッシー騒動は、さらなる大海蛇の目撃情報を引き出している。たとえば、Ellis (1997) は、1934年2月11日に『ニューヨーク・タイムズ (New York Times)』が報じている“Mauretania”号が遭遇した大海蛇に関して、この騒動の影響を指摘しているし、ネッシーの報道がなければ、当然、1977年の「ニュー・ネッシー」騒動もなかった。また、カナダのバンクーバー沖に現れるというキャドボロサウルス(別名キャディ)は、ネッシー騒動と同時期に話題になっており、その影響が考えられる²⁰⁾。なお、この報道熱は20世紀半ばまでつづいたが、それ以降、大海蛇に関する報道は減少する一方である²¹⁾。

ドイツで論争を呼んだU-28号と大海蛇についての記事もまた、このネッシー騒動に含めても良い。というのも、大海蛇の目撃者であり新聞記事の執筆者でもあるGeorg-Günther von Forstner (1882-1940)自身が、1915年に目撃した大海蛇について1933年に記事を書こうと思ったきっかけを以下のように述べているからである²²⁾。

なぜこれまで目撃したことについて黙っていたのか、と思われるかもしれない。その答えは簡単だ。ネス湖からのニュースによって自分が経験したことを思い出し、ふたたび関心をもつまで、私自身、戦争中の、この[...]情報をすっかり忘れていたのだ。(Forstner 1935a: 7)

Forstnerの記事は、1933年10月19日の『ド

イツ一般新聞 (Deutsche Allgemeine Zeitung)』に掲載された。その内容は以下のとおりである。1915年7月30日、潜水艦U-28の艦長だったForstnerは、アイルランド南西でイギリスの蒸気船“Iberian”号を撃沈した。蒸気船の沈没から約25秒後に水中で爆発が起こり、「長くとがった頭とヒレのある4つ脚のワニのような姿の20mほどの生き物」(Forstner 1935b: 10)が空中に吹き飛ばされた²³⁾。

この記事を受けて、サイエンス・ライターとして当時ドイツで著名だったWilhelm Bölsche (1861-1939)が、同紙1933年12月27日号に記事を投稿し、この「ワニのような生き物」と古代の海棲爬虫類であるモササウルスとの類似を指摘したため、この目撃談に学術的な根拠があるかのように思われた²⁴⁾。ただし、1931年に刊行されたBölscheの著作『太古の生命 (Das Leben in der Urzeit)』において、モササウルスの挿絵に、「巨大な海蛇に似た (seeschlangenähnlich) モササウルス」(Bölsche 2016: Taf. 18)というキャプションがついている点は看過できない。同書を読んでいたForstnerが自らの目撃した大海蛇を思い出す際に、同書が影響を及ぼした、とも考えられるからである。その他にも、同書には、ジュラ紀の海棲ワニであるミストリオサウルスやテレオサウルスについて、詳細な挿絵付きの記述がある²⁵⁾。Forstnerは、のちに、編集者の依頼にしたがって『ケルン絵入り新聞 (Kölnische Illustrierte Zeitung)』(1934年2月10日号)にこの大海蛇のスケッチを掲載させているが、その姿形はワニそのものである²⁶⁾。

Forstnerの記事は、批判の対象にもなっている。たとえば、1934年3月8日の『日 (Tag)』紙の折込では、フンボルト博物館のPappenheim教授なる人物によってウバザメの見間違いではないかと指摘されている。もっとも、Forstnerはそうした批判があることを予期していた。そのうえで、たとえ彼自身は批判を受けるにしても、彼の記事をきっかけとして、大海蛇を目撃した船乗りたちが自らの体験を公けにできるようになることを期待していたのである。

Forstnerが生きていた時代、船乗りの間で大海蛇の話は禁句だった。彼は、大海蛇を見たと言ったために友人から「たとえ100匹の海蛇を見たとしても黙っていた方が良い。さもないと必ず、嘘つきかノーマルじゃないと思われる」(Forstner 1935b: 14)と忠告された船長の話を紹介している²⁷⁾。

しかし、Forstner艦長の勇気ある告白記事も、「フェイク・ニュース」の仲間に入れられることになりそうである。歴史家Mike Dashは、1915年当時の報道を調査し、“Iberian”号の少なくとも61名はいた生存者が誰も大海蛇に言及していないこと、Forstner自身の航海記録や著作にもこの件への言及がないことなどを根拠として、「von Forstnerはせいぜい吹き飛ばされた[“Iberian”号の]破片を見誤ったか、より可能性が高そうなのは、単純に、後年この物語を創り上げたのだ」(Dash 2009)と結論づけている²⁸⁾。また、古生物学者Darren Naishも、「von Forstnerがこの物語をすべてでっち上げた、と結論づけねばなるまい」(Naish 2017: 42)と断じている。

IV 図像の力

大海蛇報道の歴史を概観してみると、「長く大きな生き物を海で見た」という単調なテキスト(あるいは「使い古された嘘」)には、センセーショナルな、そして、大海蛇を既知の生き物とは違った姿で描いた(あるいは写した)図像が不可欠だったのではないかと思えてくる。

新聞が普及する以前から、Olaus Magnusの著作をはじめ、大海蛇を扱った多くの著作では、目撃者でも執筆者でもない挿絵画家が、大海蛇の姿を描いている。そこには、客観的な事実に基づかない画家の空想が入りこんでいたが、彼らが描いた大海蛇は読者に大きな影響を及ぼした²⁹⁾。また、1808年にシェトランドに漂着した死体や1977年に日本の漁船が釣り上げた「ニュー・ネッシー」など、ウバザメの死体が大海蛇のものとしてされることしばしばあっ

たが、そうした死体の(未知の生物であるかのように見える)挿絵や写真もまた、大きな影響力を持っていた。19世紀のイラスト紙では、かなり精密な挿絵が用いられているが、たとえば1868年10月24日の『ハーパーズ・ウィークリー (Harper's Weekly)』に描かれた挿絵では、メイン州で捕らえられたウバザメの(オスの交尾器である)鰭脚がライオンの脚のように描かれており、不可思議な存在に仕立てあげられている³⁰⁾。また写真についていえば、ネッシーの「外科医の写真」については上述のとおりだし、マッコウジラの内臓から取り出された「子供」の死体写真がバンクーバーの『プロヴィンス (Province)』(1937年10月16日号)に掲載されなければ、キャドボロサウルスはそれほど話題にならなかったのではないか³¹⁾。

V おわりに

本稿では、ドイツ語圏で「虚偽の新聞記事一般」の代名詞とされる大海蛇についての報道の歴史を見てきた。その過程で明らかになったのは、以下の3点である。

- 1) 大海蛇については多種多様な証言がある。逆にいえば、雑多な目撃情報が大海蛇としてひとまとめに報じられてきた。このことは、それぞれの目撃情報の質の多様性にもつながる。
- 2) (図版付きの)センセーショナルな報道があると目撃情報が増える。その事象に注目が集まったことから、取材の頻度も高まるだろうし、自らの体験を新聞社に持ち込む目撃者も増えるだろう。その際、注目度を利用しようとして(ジャーナリストあるいは非ジャーナリストによって)捏造された記事もあるだろう。さらに、こうした報道さえなければ起きなかった誤解に基づく目撃情報もみられる。
- 3) 大海蛇報道については、学識者からの反論が(他の)新聞に掲載されることもあつ

た。つまり、大海蛇報道が捏造だったとしても、虚報が一方向的に垂れ流されていたわけではなく、ニュースの信憑性を読者自らが検証する機会が提供されていた、といえる。

大海蛇報道の歴史は、シラーの『ピッコロミーニ親子 (*Die Piccolomini*)』(1799)における有名な台詞、「戦争が戦争を養う」(Schiller 1962: 51)を思い起こさせる。なぜなら、事実／誤解／捏造に基づく大海蛇についての報道が、さらなる大海蛇の目撃情報を誘発し、新たに報道され、それらの報道内容を検証する過程で、賛否両方からの新たな報道が生まれるからである。大海蛇の実在が一度も証明されていないにも関わらず、何世紀にも渡って報道が繰り返されてきた背景には、こうした構造があった。言うなれば、虚報が虚報を養ってきたのである。

先行研究によれば、19世紀以降に報道された「大海蛇」の多くが、既知の生物などの誤認として説明が可能なのである。したがって、「大海蛇発見」という報道の多くは虚報、「フェイク・ニュース」だったとみなせる。しかし、こうした「フェイク・ニュース」は、今日話題になっているような、世論を操作したり「陰謀」を覆い隠すためのものとは質が違った。大海蛇に関するニュースは、新聞読者に「お楽しみ」(Hollmann 1937: 42)を与えるためのものだったからこそ、何世紀もの間、愛され、報道されつづけてきたのだろう。

注

- 1) Sprachkritische Aktion «Unwort des Jahres»(「言語批判活動『粗悪語大賞』」)によって選定される語彙で、対象となるのは、「人間の尊厳」や「民主主義」を傷つけ、「社会集団の差別」や「誤解」を招く表現である。Vgl. *Sprachkritische Aktion: Unwort des Jahres*. (<http://www.unwortdesjahres.net/index.php?id=2>) なお、“Lügenpresse”は、19世紀にはすでに議論の対象となっている歴史のある語だが、同賞は、2000年代以降の極右団体の活動と結びつけられて受賞した。Vgl. Probst 2017: 98.
- 2) たとえば、平和博(2017)『信じてはいけない 民

主義を壊すフェイクニュースの正体』(朝日新聞出版)では、「フェイク・ニュース」をインターネット上で拡散されるニュースと定義し、あたかも(新聞やテレビなど)既存のマスメディアでは捏造報道や偏向報道がおこなわれてこなかったかのような印象を与えている。

- 3) Vgl. Hosokawa 2014: 58.
- 4) Vgl. Bertsch 2000: 31f.
- 5) Hollmann (1937)は、1721年に「ホルシュタイン通信 (*Holsteinischer Correspondent*)」(のちの大新聞『ハンブルク通信 (*Hamburgischer Correspondent*)』)に掲載された「ナポリの漁師がナポリの海岸、マグダレナ橋のそばで6月6日に釣った驚くべき魚」という記事を、最初期の、読者をおもしろがらせる以上の記事として挙げている。この記事の挿絵は、人食いザメの容貌を的確に表していると思われる。いずれも海の「怪物」であるが、「海蛇」については「メルヘン」と批判され、「人食いザメ」の記事は事実に基づいていると評価されている点が興味深い。Vgl. Hollmann 1937: 42f. なお、Hosokawa (2014)におけるコーパスには、大海蛇に関する記事こそなかったが、『ウィーン一般新聞 (*Wiener allgemeine Zeitung*)』に、以下のような記事を見つけることができた。「MalatzkaのMariathal [現スロヴァキア Marianka]において、長らく大きな被害を出していた巨大なワシが、最近、鉄製の罠によって捕らえられた。翼を広げると、一方の端からもう一方の端まで17シューあった。その足は太く、ふつうの男の腕ほどもあり、クチバシの長さは5ツォル。誰にも罠から外す勇気がなかったで、このワシはそのまま射殺されねばならなかった。ワシに近づいたグレートデーンは、そのクチバシで頭にケガを負われ、数時間後に死んでしまった」(*Wiener allgemeine Zeitung*, 3.1.1851: 1)「シュー」はフィートの別称であり、当時のウィーンにおけるフィートは約316mmなので、この「ワシ」は翼長が5m以上もあったことになる。Vgl. Mozchnik 1848: 131.
- 6) 本稿で紹介するニュースに登場した大海蛇だけでも、その正体は、イカの触腕からイルカの群、カワウソ、鰐脚類、リュウグウノツカイ、(既知の)ヘビ、ワニ、サメ、(首長竜のような)古代の生物など、さまざまに推測されている。それだけ、目撃された「大海蛇」の容貌は多様なのである。そのため、ドイツ語圏では、“Seeschlange”だけでなく“Seeungeheuer (海の怪物)”という語もよく用いられている。
- 7) なお、このグロスターがあるアン岬周辺では、すでに17世紀半ばにもヘビのような海の怪物が報告されている。Vgl. Probst 2013: 397, 401f.
- 8) Vgl. Ellis 1997: 52ff., 57, 66; Probst 2013: 399.
- 9) 興味深いことに、この興行師がドイツ人であっ

たことも、展示物の信憑性を高めていたらしい。ニューヨークの『福音伝道者 (Evangelist)』では、「彼 [Koch] は、真の学問の子であり、極めて謙虚かつ社交的な人物で、いかさま師だとかホラ吹きとはまるで異なり、典型的にドイツ的な率直さと丹念さを兼ねそろえたドイツ人である」(zit. nach Ellis 1997: 59) と紹介されている。Vgl. Ellis 1997: 57ff.; Reitz 2005: 61.

- 10) Vgl. Ellis 1997: 55.
- 11) Vgl. Gould 1935: 67, 79ff., Abb.5; Ellis 1997: 60ff.
- 12) Vgl. Hosokawa 2014: 56, 94f.
- 13) Vgl. Ellis 1997: 42.
- 14) Vgl. Ellis 1997: 42, 45ff.; Reitz 2005: 59.
- 15) Vgl. Ellis 1997: 46f., 49.
- 16) Vgl. Lange 1979: 29ff.
- 17) Vgl. Probst 2013: 31ff.
- 18) この「外科医の写真」については、すでに捏造写真であると結論づけられている。また、こうした騒動の背景には、1933年に公開され、世界的なヒット作となった映画『キングコング (King Kong)』の影響も指摘されている。同作において特殊撮影で再現された恐竜は、多くの「ネッシー目撃者」にも影響を与えていたと考えられる。Vgl. Probst 2013: 37ff., 43.
- 19) たとえば、2001年にはスウェーデンの捜索隊が調査をおこなっている。Vgl. Probst 2013: 59.
- 20) Vgl. Ellis 1997: 71ff.
- 21) Vgl. Reitz 2005: 61.
- 22) Vgl. Reitz 2005: 60; Dash 2009.
- 23) Vgl. Forstner 1935b: 9f.; Dash 2009. なお、第一次世界大戦中には、1917年5月22日にアイスランド沖でイギリスの武装商船“Hilary”が大海蛇に遭遇している。Vgl. Lange 1979: 85ff.; Ellis 1997: 68ff.
- 24) Vgl. Forstner 1935b: 10; Lange 1979: 84.
- 25) Vgl. Bölsche 2016: 134ff.
- 26) このスケッチは、実際にナイルワニをモデルに描かれたらしい。Vgl. Forstner 1935b: 11; Naish 2017: 42.
- 27) Vgl. Forstner 1935b: 12ff.
- 28) たしかに、Forstnerは、戦時中の1916年に出版した自伝のなかで、この出来事については一切、言及していない。しかし、その理由を、彼自身が述べているように「忘れていたから」、あるいは「話せばノーマルじゃないと思われるから」と考えることも不可能ではないだろう。Vgl. Forstner 2016.
- 29) Vgl. Ellis 1997: 44f.
- 30) ウバザメの鰓部分が腐敗して脱落すると、細長い首を持った生き物に見えること、サメの死体はその肌がしばしば繊維状になり、毛の生えた生き物に見えること、ヒレや鰭脚が脚のように見えること、などがその理由である。Vgl. Ellis 1997: 49ff.,

71f.; Reitz 2005: 62f.

- 31) Vgl. Ellis 1997: 74f.

参考資料

- オラウス・マグヌス (2017 [1555]) 『北方民族文化誌 (下巻)』(谷口幸男訳) 溪水社。
- Bertsch, Johanna (2000) : *Wider die Journaille. Aspekte der Verbindung von Sprach- und Pressekritik in der deutschsprachigen Literatur seit Mitte des 19. Jahrhunderts*. Frankfurt. a. M.
- Bölsche, Wilhelm (2016 [1931]) : *Das Leben in der Urzeit. Aus den Tagen der großen Saurier*. 2., Neuauflage der Originalausgabe von 1931. Hamburg.
- Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm*. (1854-1960) 16 Bde. in 32 Teilbndn. Leipzig. [=DWB]
- Ellis, Richard (1997) : *Seeungeheuer. Mythen, Fabeln und Fakten*. Übers. v. Monika Niehaus-Osterloh. Basel.
- Forstner, Georg-Günther (1935a) : Zur Einführung. In: R. T. Gould/G.-G. v. Forstner: *Begegnungen mit Seeungeheuern*. Leipzig. S.5-8.
- Forstner, Georg-Günther (1935b) : Beobachtungen von S. M. Unterseeboot „U 28“ und andere. In: R. T. Gould/G.-G. v. Forstner: *Begegnungen mit Seeungeheuern*. Leipzig. S.9-21.
- Forstner, Georg-Günther (2016 [1916]) : *Als U-Boots-Kommandant gegen England*. Wolfenbüttel.
- Freytag, Gustav (1966 [1887]) : *Die Journalisten. Lustspiel in 4 Acten*. Faksimiledruck nach der Ausgabe innerhalb der Gesammelten Werke von 1887. Göttingen.
- Gould, Rupert Thomas (1935) : Seeungeheuer aller Zeit. In: R. T. Gould/G.-G. v. Forstner: *Begegnungen mit Seeungeheuern*. Leipzig. S.22-179.
- Hollmann, Wolfgang (1937) : *Alte deutsche Zeitungen. Bilder und Gestalten aus der Frühgeschichte des deutschen Zeitungswesens (1600-1800)*. Leipzig.
- Hosokawa, Hirofumi (2014) : *Zeitungssprache und Mündlichkeit. Soziopragmatische Untersuchungen zur Sprache in Zeitungen um 1850*. Frankfurt a. M.
- Kreißig, Horst (1966) : Nachwort. In: Gustav Freytag: *Die Journalisten*. Faksimiledruck nach der Ausgabe innerhalb der Gesammelten Werke von 1887. Göttingen. S.113-124.
- Lange, Paul Werner (1979) : *Seeungeheuer. Fabeln*

und Fakten. Hanau.

Mozhnik, Franz (1848) : *Lehrbuch des gesammten Rechnens für die vierte Classe der Hauptschulen in den k. k. Staaten.* Wien.

Naish, Darren (2017) : *Hunting Monsters. Cryptozoology and the reality behind the myths.* London.

Probst, Ernst (2013) : *Seeungeheuer. 100 Monster von A bis Z.* Norderstedt.

Probst, Maximilian (2017) : Welt unter Druck. So alt wie die Presse ist der Vorwurf, sie verbreite Lügen und sei das Werkzeug von Verschwörern. In: *ZEIT Geschichte. Epochen. Menschen. Ideen.* Nr.3/2017. S.98-101.

Rathke, Heinrich (1841) : Ueber die Seeschlange der Norweger. In: *Archiv für Naturgeschichte.* 7. Jahrgang. S.278-288.

Reitz, Manfred (2005) : *Rätseltiere. Krypto-Zoologie-Mythen, Spuren und Beweise.* Stuttgart.

Schiller, Friedrich (1962 [1799]) : Die Piccolomini. In: *Wallenstein. Ein dramatisches Gedicht I.* Stuttgart. S.45-135.

Dash, Mike (2009) : Baron Von Forstner and the U28 sea serpent of July 1915. In: *Charles Fort Institute Blogs.* <http://blogs.forteana.org/node/93>. (24.10.2017)

Sprachkritische Aktion: Unwort des Jahres: <http://www.unwortdesjahres.net/index.php?id=1> (24.10.2017)

(2017年11月24日掲載決定)